

## 飛驒地区を例とした地域博物館のあり方

丸 山 茂

博物館の使命とは何か。博物館には、国や地方の別を問わず、世界に共通する理念があるのか、と思う。

機能を果たす博物館は、観る人、訪ねる人の意にこたえられるものであらねばならない。

昨年(1988)の2月下旬、私は約2週間をかけて、インドに仏跡を訪ねた。カルカッタへ着いたその翌日、インド美術の宝庫といわれる国立博物館を見学した。わが国であれば、国宝級の仏像が手の届くところに、数えきれないほどある。

女子大生が、通路に座り順路を妨げても、見学者を一向気にすることなく、カジュラーから出土した有名な石像「恋文を書く女」を描いている。何と大らかなことか。

館内の一隅に肉感的な女性の石像があり、ふくよかな乳房は、参観者の手が触れることによって



恋文を書く女  
(カルカッタ博物館)

か、盛り上がった部分だけが黒光りしている。

石像などの立像は、参観者と共にある、とこの博物館に見た。

帰り近くなった3月2日、インドの初期仏

教美術の遺跡として名高いサンチを訪れた。一行10余人と、サンチの大塔と共に博物館を見学した。館内は撮影禁止である。記録をほしい一念から、一行が近くのロッジで休みをとる間に、私一人が、歩いて10分ほどの博物館へ再度足を運んだ。

写真を撮らせてくれないか、博物館の図録がないか、と手振りで懇願した。心は通ずるものである。受付の瘠身の男は許してくれて、英文の図録2冊を差し出した。私は深く感謝し、お金は? と問うと、「ライター」と言う。私は2個のライターをポケットから取り出し、ありがとうと言った。

私は、拙ない経験しかもたないが、帰国した後、わが国のどこの博物館よりも、インドで学んだ博物館の印象が強く残っている。

それは、少なくとも、私の意を満たしてくれるインドであったからである。求めに応じて意がかたう、また個性がある、開かれた博物館であったからである。このことは、規模の大小にかかわらず、その使命を全うし得るのではあるまいか、と考える。

飛驒の博物館相当施設は、まだ未熟である。努力して、館の顔をつくり育てることが、何よりも肝要ではないか。そのため定期的に、飛驒の施設が話し合いの場をつくることを提案したい。先ず足元を見つめ直して話し合えば、地域博物館のあり方はどうあるべきか、必ず答を出してくれるだろう。

〈前高山市郷土館館長〉

# 信長時代の岐阜城

—— 山頂部についての試論 ——

土山公仁

岐阜城は信長が天下布武の拠点としたことで知られています。信長時代の岐阜城については、永禄12年(1569)信長に会見するため来岐したルイス・フロイス、山科言継とよつぐがそれぞれ良好な記録を残しています。しかし、それを現状に照らし合わせて考えてみるということは、十分には行われていなかったように思います。

岐阜城を考える手だてとして、直接建築物に結び付く瓦を整理分類したことがあります。それを元にして、岐阜城山頂部について私なりの推論を述べてみたいと思います。

山頂部で瓦が採集されている地点は現在の天守閣付近、及び測候所周辺の井戸の2ヶ所です。前者の瓦は大坂城・清須城など秀吉時代のモチーフに類似するのに対し、後者からは明智光秀が築いた坂本城・細川藤孝が築いた勝龍寺城など信長時代に共通したモチーフの瓦が採集されています。また、後者からは金箔を貼った瓦も見つかっています。金箔瓦も安土城の時代と大坂城の時代では技術に相違が見られることを中村博司氏が指摘しています。岐阜城の金箔瓦は安土城のタイプなのですが、技術に未熟さが感じられ、安土に先行する可能性が高いと思われます。以上のことから、信長時代に瓦葺きの建物は現在の天守閣の位置ではなく、測候所あたりであったと思われるわけです。

承応3年(1654)の岐阜町絵図を見ますと天守と書かれたやや下の方に屋形所と記された部分があります。この屋形所が測候所に当たるわけです。

北垣聡一郎氏によると、現在の天守台は天正年間もしくはそれ以降のものようです。石垣がなかったとすると山頂部にはわずかな平坦面しか取れず、大きな建物は立ちません。ところが、ルイス・フロイス、山科言継の記録を読むと、かなり立派な建物があったことが想像されるのです。ですから、古い瓦が採集される測候所にあった屋形で、信長はフロイスと食事し数

時間にわたり語り合ったのではないかと考えているわけです。

それでは、山頂はどうなっていたのでしょうか。これも山科言継の記録が参考になります。言継は信長から食事などの接待をうけた後、信長の案内で上の権現など城中を見学したと記しています。信長が案内したくらいですから、なにかエキセントリックな趣向があったかも知れません。私はこの上の権現が山頂にあったと考えています。

金華山は古くから信仰の対象でした。伊奈波神社の縁起から、本宮は山頂で峯権現=薬師如来、中宮は西北の丸山で因幡大菩薩=阿弥陀如来、下宮は金大明神=聖観世音菩薩という中世の典型的な神仏習合の様子をうかがうことができます。現在、下宮は金神社に当たりますし、峯権現は権現山に祀られています。

永禄10年(1567)信長は新しい美濃の支配者になるわけですが、岐阜城の建設に当たって最高所に古くからの宗教的シンボルを残し、やや下った場所に屋形のようなものを築いたのではないのでしょうか。これは、尾張のうつけ者が新しい支配者になるということで恐れおののいていた古くからの住民に対して非常に有効な懐柔策であったと思われるます。

安土城の場合、信長は最高所に天守閣を築き、やや離れた城内に搦見寺を建立しています。これは岐阜城のモデルを逆転させ、従来の宗教的権威より自らを高位に置いたものと言えるのではないのでしょうか。これは信長自身の神格化ともかかわってくる問題です。

以上が瓦を元に、ルイス・フロイス、山科言継の記録を読み直して考えてみた岐阜城山頂部のイメージです。

写真・図・参考文献などを掲載することができませんでしたが、当館の研究紀要3および特別展『信長—岐阜城とその時代』図録を参照していただければ幸いです。(市歴史博物館)

## 調査研究

# ヒメタイコウチの分布と岐阜県

長谷川 道 明

ヒメタイコウチは異翅目タイコウチ科に属する昆虫で、体長20mmほどの大きさである。タガメ・ミズカマキリなどと同じ水生のカメムシの仲間であるが、深い池や沼には生息せず、湧水のある湿地にのみみられる。東濃地方には地下水位が高いために各地に湧水による湿地(湿原)が点在しているが、そういった場所が生息地である。ところがヒメタイコウチはタガメやミズカマキリ、タイコウチのように日本各地にどこでも広くみられるといったものではなく、非常に限られた一部の地域にしか分布していない。国内では、静岡・愛知・岐阜・三重・兵庫の5県でみつまっているにすぎないのである。

ヒメタイコウチが初めて発見されたのは、1913年、中国山東半島青島においてであった。発見者は済南大学の教授だったW. Hoffman氏で、この時の標本は後に大英博物館に保管され、12年後の1925年、江崎悌三博士によって、*Nappa hoffmanni* という学名の下に記載命名された。その後、朝鮮半島、中国東北部、ソ連ウズリー地方などで相次いで発見されたが、当時は大陸にのみ分布する種と考えられていた。

1933年、兵庫県甲東園で日本で初めて1個体が採集された。しかし、場所が国際貿易港、神

戸の近くとあって、人為的に移入されたものが採集されたのだらうと、この最初の記録は疑問視された。ヒメタイコウチが国内にも分布することが疑いのないものになったのは、1935年、山田満寛氏が愛知県西尾市で、その生息地を発見してからである。その後、愛知県を中心に続々と生息地がみつかり、現在では図に示したような地域に分布していることがわかってきた。岐阜県でも、多治見・土岐・瑞浪・御嵩・関などで確認されている(長谷川、1988)。

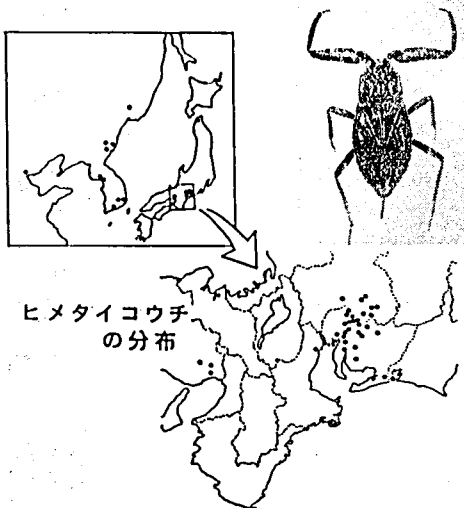
ところで、なぜヒメタイコウチはこのように限られた地域にしか分布していないのだろうか。

堀・佐藤(1984)はヒメタイコウチのこの飛び石的な分布の要因として次のような推論をした。ヒメタイコウチは第四紀の低温期に日本に渡ってきた。そのころ現在の東海地方から近畿地方には、東海湖・古琵琶湖・古大阪湖と連なる大きな淡水域があり、その淡水域を中心に分布を拡大していった。しかしその後の海水面の上昇、淡水域の消滅によって次第に絶滅を余義なくされていった。ところが、現在の生息地だけは湧水による湿地(ヒメタイコウチが生息するための環境)が形成されやすかったために生きのびることができたのである。

この推論を証明するにはさらに詳細な分布の調査、各生息地におけるくわしい環境条件の調査、そしてヒメタイコウチの生理的、生態的側面からのより詳細な研究などが必要である。

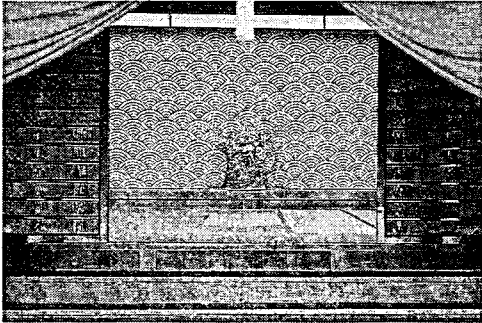
さて、岐阜県美濃地方はヒメタイコウチの東海地方での分布の北限にあたっている。分布の研究には周辺地域の詳細な調査が重要なデータとなる。この地域の精密な分布状態を明らかにできれば大きな研究の進歩となるはずである。

すでに西尾市では、その生息地が台地あるいは丘陵と沖積平野との境界線に集中しているといった興味深い報告もなされている(伴・他、1989)。私もそれに続きたい。(岐阜県博物館)



## 国史跡 高山陣屋

▽506 高山市八軒町1丁目5番地  
TEL <0577> 32-0643



説明者は声涙俱に下るような口調で大原騒動と善九郎の経緯を話すと、私に「そのめがねのお兄さん」と声をかけながら一束の善九郎の遺書のコピーを渡して従って来た人に配ってくれと頼んだ。その際「関心をもっている人だけに渡して欲しい。たとえコピーとは言え、この遺書が紙くずとして捨てられ土足に踏みにじられるのは忍びない」と言った。

その説明者が元陣屋の管理事務所長藤井博司氏である。これが万葉善九郎と私の出会いであった。(森村誠一著「土の魂」あとがき)

### ◆ 恥ずかしくない対応

今年博物館協会に加盟された高山陣屋を訪れた。さりげなく依頼を受けたとき、高山に出掛け、そして陣屋を見学することには食指が動きつつも、見学記をまとめる目的には躊躇する思いがあった。観光依存度の高い地域経済の街高山の、国指定史跡陣屋は一般のガイドブックに必ず採り上げられている、今さらの記録になるのではないかと気になったのである。

ためらいながらも腰を上げたのは、一つに高山陣屋の解説者による、追体験を意図した語り口を思い起こしたからである。

挨拶を交わした小林俊雄所長さんも明言された。「見学者は年間40万人、その人たちに対し

て、教育委員会が管轄していながら恥ずかしい思いをする対応などしたくない。できる限り親切な案内に心掛けています」と。

解説は当管理事務所の嘱託の方4名が担当、多忙なときには他のO.Bも駆け付けるという。年末年始以外は無休、8時45分開所であるが、要望があれば8時にも開所するなど、サービスが浸透しているように思われた。

### ◆ 資料を動かす解説

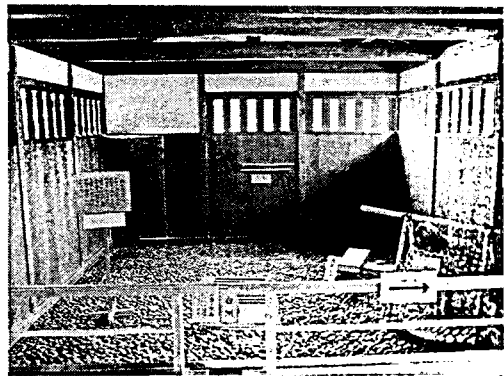
ちょうど昼食時の観光客の足取りが途絶えた一瞬に、玄関へ進んだ。いつ見ても大床の青海波模様がいい。餅花があって、親近感を醸している。御役所、御用場等順路に従って歩く。長押しに点在する兎を象った釘隠しの単純さに安堵したり、畳のふくらみに足下の安穩を感じたりする。大広間の縁に座して庭園を眺める。

寺田寅彦が随筆「案内者」の中で展開していた案内者不要論のことを思い出したが、現代においては、特に遺跡や遺物については、コーディネーターとしての解説が必要だろう、と結論づける。そこにある実物資料を、資料であった当時の使われ方が目に浮かぶように動かす必要があるだろう。善九郎の遺書も同じことだ。森村誠一氏も解説に触発されたはずである。

御白州を過ぎると、御蔵の奥の方から抑揚に富んだ解説の声が聞こえてきた。

高山陣屋は全国にあった66か所の郡代・代官所の中で、唯一の完備した遺構であるという。そのデータについては、パンフレットや『高山陣屋』(各務義章著)に詳しい。

清水昭男(岐阜県博物館学芸部長)



## 第41回公開講座報告

# 揖斐川町と春日局

とき H1. 8. 3 (木)

ところ 揖斐川町歴史民俗資料館

本年度2回目の公開講座は、西濃地区の担当で揖斐川町教育委員会と共催し、春日局の里・揖斐川町で開催した。NHK大河ドラマ「春日局」放映後、揖斐川町への関心も高まっており、当日は、暑い日であったが、県外の参加者を含めて30名もあり、大変充実した講座であった。

折戸先生は、講演の中で次のように話された。

揖斐川町は、現在の資料館の周辺が最も古くから開け、その後奈良時代には「味蜂間郡春日部里」として栄えた。室町時代に斎藤利安が白檜城を築いた。この3代目の城主が春日局の父利三であり、春日局出生の地といわれるゆえんである。なお、出生の地は他に3説あるが、このブームの中では、特定せず共存共栄と考えている。斎藤利三没後、白檜城も滅び、さらに揖斐川の流路の変遷等もあって、揖斐川町の中心は、江戸時代以降現在のようになり、天領として岡田氏が治めた。春日局は、父利三没後、稲葉一鉄に引き取られ、清水城で文武と婦女の道を教えられた。



講演後、折戸先生の解説で、まず資料館を見学した。この資料館の目玉は、揖斐川を往来した実物大の川船であり、その当時の船運の様子がよくわかる。また「春日局ゆかり」の展示もされている。

次に白檜の春日局公園を見学した。公園は、民家の一角にあり、「春日局出生地」の碑が建てられている。この辺りは、白檜城主の屋敷跡で、屋敷の礎石がたくさん出土している。そこから目を小島山にやると、中腹に白い吹き流しが見える。白檜城跡である。今は石垣の一部を残すのみとなっている。なお近くには斎藤一族の墓もある。

最後に清水の古刹月桂院を見学した。稲葉一鉄夫妻の墓を拝み、一鉄の鐘を見て、本堂で、一鉄公木像、肖像画等を見る。戦国武将の威厳が感じられる。住職が解説して下さり、春日局の母おあんは、稲葉通明の娘ではなく、通明の妹と稲葉源助との間に生まれた娘であると新説を出された。予定時間をオーバーしてここで解散したが、近くには清水城址や釣月院がある。



# 第14回 会員研修会報告

第14回研修会は、下記要領で実施しました。

## 〈研修日程〉

### ・第1日 9月20日 (水)

於；飛驒・北アルプス自然文化センター  
研修；「資料の管理と保存」

提案者；小山 司氏（飛驒民俗村）

講演；「飛驒地区を例とした地域博物館のあり方」

講師；丸山 茂氏（前高山市郷土館館長）

館内見学；飛驒北アルプス自然文化センター

井上真澄館長の館の概要説明後自由見学  
懇親会；宿泊先「飛驒路」にて各館の情報交換などの話し合い

### ・第2日 9月21日 (木)

「ひだ自然館」……吉城郡上宝村大字福地、  
山腰 悟館長による解説で見学

「大橋コレクション・飛驒大鍾乳洞」……

大野郡丹生川村日面、見学

研修は2日間とも好天に恵まれ、21名の参加者を得て充実した運営ができました。また、20日夜行われた懇親会には、14名が参加し、各館の現状など情報交換や今後の博物館のあり方などについて、夜の深まるのも忘れたように話し合いがされました。この話し合いの中で、参加者全員が、“このような話し合いが持たれるなら昼の研修会はもちろん、夜の懇親会にももっと多くの会員が参加できると良いのに”という感想を持っておられました。研修委員会としても、今後さらに充実した内容を企画すると

ともに、さらに、この研修会が実りあるものになるよう望みます。

## 〈研修会について〉

研修会は、昨年度の岐阜県博物館協会総会で研修委員会という専門委員会を設け、それまで続いていたのを引き継ぐことになりました。それをきっかけに、会員に対し研修会に望むテーマについてアンケート調査を行いました。その結果、資料の展示方法や管理保存など、会員の技術を高めるための研修と、今後の博物館のあり方など博物館理論に関する研修を行って欲しいとの意見・要望が多くありました。それに沿い研修会では、年2回の技術研修会と1回の宿泊研修を伴った講演会・見学会を企画しました。

昨年度は、岐阜市歴史博物館で「展示の方法」、大垣市郷土館で「大垣市を中心とした地域博物館のあり方」(講師・広瀬 鎮名古屋学院大教授)、岐阜県博物館で「白黒写真の現像・焼付」について行ってきました。

本年度は、6月14日、博石館にて「展示資料の管理と保存」について行い、そして今回の研修会を行ったわけです。

研修委員会では、参加者の多くが、充実した研修会であったという感想を持っておられるのを支えに、多くの会員が参加できるよう努力して行きたいと思います。会員の皆様の参加と、会を発展させるためのご意見を期待しています。

第15回は、12月14日(木)に岐阜県博物館で、手作り展示の方法について行います。



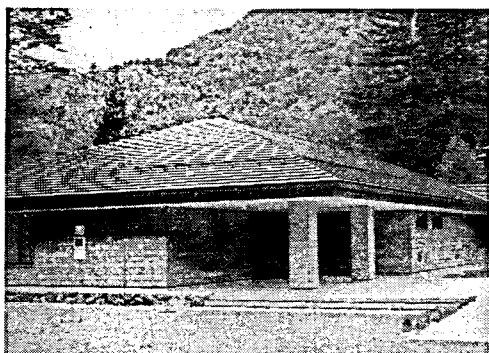
## 第14回 会員研修会に参加して

研修第1日の9月20日は、前日までの雨模様から清々しいほどの秋晴れであった。研修会場の飛驒・北アルプス自然文化センターは最近建てられた真新しい施設で、この地域の自然が大変理解しやすい立体的展示であった。またマルチスライドやQ&Aなどの楽しく学べるコーナーもあり、飛驒の自然をより身近に感じた。

自然文化センターの研修室を借用して行われた研修会では、飛驒民俗村の小山司学芸員から「資料の管理と保存」というテーマで、民家の老朽箇所<sup>らうこう</sup>の改修や保存のあり方についてスライドを写しながら提案していただいた。その中で修理箇所の修復の仕方や民具等の展示と保存のあり方について課題や悩みを出された。討議の中で民俗資料それぞれのもつねうちと意味をふまえて管理保存することや、展示資料に触れ体験できる場を設定することの大切さ等が出された。

その後「飛驒地区を例とした地域博物館のあり方」と題して丸山茂先生の講演を拝聴した。先生は、飛驒民俗村の民家の一つ一つを取り上げて、形式・歴史・特色を語られた。そしてそれらの共通点や相違点を充分ふまえて、説明したり展示工夫したりすることが大切であることを述べられた。このことが、民家や民具資料というモノを通して飛驒に生きた人々の生活・文化・歴史さらに自然をも見学者に語りかけていき、地域らしさ（飛驒らしさ）を鮮明にし、博物館が生きた存在になると話を結ばれた。

先生の話は、博物館施設に携わる者にとって



飛驒・北アルプス 自然文化センターの概観

施設が存在する意義を確固と把握した上で、より専門的研究を深めていく大切さと、資料を通して地域全体への深い愛着が必要不可欠であることを鋭く指摘されたといえる。その夜の懇親会では、研修で学んだことや各自の課題を語り合い、夜の更けていくのを忘れるほどであった。

2日目の研修も快い天候に恵まれ、ひだ自然館と飛驒鐘乳洞を見学した。ひだ自然館では前夜お世話になった飛驒路の館主山腰悟氏に案内していただいた。福地に産する珍しい化石等について丁寧な説明を聴き、地球の生成から現在に至る<sup>つづきつづ</sup>悠久な歩みを実感し、化石に見入るほどであった。もっとじっくり見学したいという気持ちをもちながら、飛驒鐘乳洞へ向った。

ここでは、大橋氏のコレクションの多さと壮大きにまず圧倒された。そして鐘乳洞内では肌寒さを覚えながらも、大地の営みのすごさに感心させられた。

こうした1泊2日の会員研修会は、初めて参加した自分にとって、実に内容が深く視野が広がる絶好の場であった。特に丸山先生が話された生きた博物館は、館に携わる者の深い地域全体（生活・文化・歴史さらには自然をも包含したもの）への愛着があつてこそ成り立つという指摘であり、自分自身の在り方を見つめ直す視点となった事が何よりの収穫であった。研修会により多くの方々に参加し、互いに研鑽を深め合う場として、今後も積極的に参加できたらと思った。



ひだ自然館内での化石の産状の観察

## 体験学習を大切に

丸田 強士 (愛知県小牧市在 23歳学生)

現在私は、愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールド内「ラクダの広場」にて、フタコブラクダや木曾馬の飼育展示のアルバイトをしています。そこでは、日曜日の午後1時から3時までの間、来観者にラクダの背に乗っていただいたり、ラクダの毛を利用して、毛糸づくりの体験学習も催しています。実体験に基づくここでは、見に来た方々へ一層の感嘆を与えることができます。

博物館というと、展示品を観る、鑑賞する、という体験が基本です。しかし、展示されたもので、陽の当たる場所に出るのはほんの一握りです。ひどいものになると使い方も分からぬまま収蔵庫に入れられて資料としての価値すら失い、ほこりを被ることになります。

この道具はどうしたら使えるのかを理解するには、体験学習を開くことが一番だと思います。そうすれば、自分一人でなく、多くの方々と共に道具の使い方を学ぶことができますし、後世に伝えていけると思うからです。

生涯学習の時代といわれる今日、博物館が社会教育施設の一環であるならば、体験学習を通し、伝えることも役目だと考えます。来観者に何かを学び、知ってもらいたいという配慮が大切であると思います。

### ◎第14回東海三県博物館協会 交流研修会の案内

本年度の研修会が以下のように開催されます。多数で参加くださいますようお願いいたします。

1. 期 日 平成元年11月29日(休)～30日(休)
2. 場 所 伊勢市佐八町池の上165-1  
三重県厚生年金休暇センター  
0596-39-1200
3. テーマ 「開かれた博物館・受身でない博物館」

当協会を代表して日本大正村理事長三宅重夫氏が「日本大正村におけるボランティア活動」

と題して発表をしていただきます。

### ◎ガイドマップ「岐阜県の博物館」 の販売促進についてご協力を

本年3月に初版発刊以来6カ月がたちました。各方面で大変好評を得、多くの皆様に活用いただいています。9月から岐阜市の「大衆書房」の店頭でも販売しています。

博物館協会加盟館・園でも多くのご注文をいただきましたが、未注文の館・園がまだ多いのが現状です。1冊50円という手ごろなガイドマップです。ぜひ各館・園での販売のご協力をお願いします。ガイドブックについての問い合わせは協会事務局へ。

### ◎地域に伝わる年中行事を お知らせください。

〈岐阜県博物館からのお願い〉

岐阜県博物館で秋の特別展「移ろいゆく年中行事」が10月4日から開催されています。左義長・山の講・天神祭など県下22市町村にかかわる年中行事の資料が展示紹介されています。しかし、今回紹介されているのは県下の数ある年中行事のほんの一端にすぎません。それぞれの地域で、すばらしい年中行事が行われ文化の伝承がなされていることと思います。岐阜県博物館ではこの特別展を機会に、岐阜県下に伝承されている年中行事について多くの情報を収集し、調査研究活動を深めていきたいと考えています。

各地域の郷土館・資料館等で得られている年中行事の情報や、古くから伝わる年中行事が身近にありましたら、ぜひ情報を提供してください。情報をいただける場合は下記へよろしく。

〒501-32 関市小屋名1989

岐阜県博物館学芸部人文係

### 編集後記

昨年から、地域の博物館はどうあるべきかに焦点をあて各界の皆様のご意見を賜ってきました。今後は各館・園のユニークな取り組みを紹介していきたいと思っております。ご協力を。